

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01182

研究課題名（和文）近世ヨーロッパにおけるキリスト教的ストア主義の生成と展開に関する人間学的研究

研究課題名（英文）An Anthropological Study of the Formation and Development of Christian Stoicism
In Early Modern Europe

研究代表者

津崎 良典 (Tsuzaki, Yoshinori)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：10624661

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,000,000円

研究成果の概要（和文）：16世紀ヨーロッパにおいて古代ストア主義は、とりわけセネカの思想を中心に、リブシウス、デュ・ヴェール、そしてシャロンらによって受容された。ただし、その過程でキリスト教的観点から修正を施され、その結果、《キリスト教的ストア主義》と呼称しうる新思潮を形成した。本研究は、この新思潮の特徴を人間学的観点から分析した（とりわけ情念論と意志論に傾注した）。その成果をもって、哲学者（デカルト等）、文学者（コルネイユ等）、イエズス会士、ジャンセニスト、オラトリオ会士など、次世代による人間学的考察における《キリスト教的ストア主義》への肯定的/否定的応答について、一定の見通しを立てることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、12世紀ルネサンスならびに14世紀ルネサンスとは区別して独自に考察すべき歴史的事象として16世紀ルネサンスを前景に押し出すことで、近世に特徴的な哲学的営為の多様な源泉の一つをそのうちに求め、かつ、詳らかにする取り組みの一翼を担いえたことである。この場合の「ルネサンス」とは、古代懐疑主義、エピクロス主義、そして本研究が関心を寄せる古代ストア主義の復興であり、それが近世哲学の生成と展開に果たした役割を多角的に解明する研究に本格的に参入することは、この時代に活躍したデカルト、スピノザ、ライブニッツといった哲学者を論じれば事足りるとする従来の西洋哲学史研究に修正を迫るものである。

研究成果の概要（英文）：In 16th century Europe, the philosophy of ancient Stoicism, based mainly on thoughts put forth by Seneca, was reviewed by Lipsius, Du Vair, and Charron. In the process it was modified to better suit a Christian perspective which resulted in the formation of a new school of thought that can be called "Christian Stoicism". This study has analyzed the characteristics of this new school of thought from an anthropological perspective (with particular attention paid to the theory of passions and will). With the results of this study, we were able to formulate a certain outlook on the positive and negative responses to "Christian Stoicism" in the anthropological reflections of the generations that came after Lipsius, Du Vair, and Charron, including philosophers (Descartes, etc.), literary scholars (Corneille, etc.), Jesuits, Jansenists, Oratorians, and others.

研究分野：西洋近世哲学史

キーワード：リブシウス シャロン デュ・ヴェール デカルト 新ストア主義 キリスト教 情念 運命 / 摂理

1. 研究開始当初の背景

古代ギリシア・ローマ哲学のうち、アリストテレス哲学の12世紀ヨーロッパにおける復興(受容・修正・活用)とプラトン哲学の14世紀における復興につづき、古代ストア派の哲学者たち、とりわけセネカ、エピクテトス、そしてマルクス＝アウレリウスの諸言説が復興を見せたのは、16世紀になってからのことである(しかしゼノン、クレアンテス、クリュシッポスなどは未だ殆ど知られていなかった)。この三名の哲学者に関する書籍の出版状況から判断できることとして、当時の知識人たちがセネカに最も強い関心を示したのは1590年代から1640年代までであり、それ以前については1515年から始まる準備期間として、それ以後についてはストア主義への関心が薄れていく過程として捉えられる。この準備期間において注目に価するのは、一方でフラマン語圏カトリック陣営からは人文主義者エラスムスの活動(1515年にセネカの本格的な著作集を編集)であり、他方でフランス語圏プロテスタント陣営からは、宗教改革者カルヴァンのそれ(1532年にセネカ『寛容について』校訂版を刊行)である。そしてこの準備期間の集大成として位置づけられるのが、セネカの『ルキリウス宛書簡集』等々を大々的に引用する『エッセ』の第三巻(=最終巻)を1588年に刊行し、哲学史家から《新ストア主義》と呼称される思潮を用意したモンテーニュである。

それでは、この新思潮は以上の準備期間を経て1590年代から1640年代にかけていかなる展開を具体的に見せたのか。その初期段階に出現したのは、17世紀のイエズス会士ピエール・レカロピエの主著『神学的人文主義(Humanitas theologica)』(1660年)に既出とされる用語を借りるなら、《キリスト教的ストア主義》と呼称しうる思潮であろう。この場合、人間を神的存在にまで高めることを主眼とするストア主義と、超越的な存在に他ならない神を前にして、原罪のために墮落した人間を貶めることを忘れないキリスト教の二律背反をいかに解釈するか、という人間学的論点が問題になると考えられる。つまり《キリスト教的ストア主義》とは、古代ストア主義とキリスト教を対立させるのではなく、それらの区別を通じて最終的には両者を統合すべく、両者のあいだに横たわる溝を埋めようとする知的努力のこととして理解されるのだ。具体的にはフラマン語圏では、『精神の不屈について(De constantia)』(1584年)、ならびにセネカの校訂版準備の産物『ストア哲学への手引き(Manuductio ad Stoicam Philosophiam)』(1604年)と『ストア派の自然学(Physiologiae stoicorum)』(同年)の著者ユストゥス・リプシウスが、フランス語圏では、『社会の災禍に際しての精神の不屈と慰めについて(Traité de la constance et de la consolation ès calamités publiques)』(1590年)と『ストア派の道徳哲学(Philosophie morale des stoïques)』(1598年)の著者ギョーム・デュ・ヴェール、そして『知恵について(De la Sagesse)』(1601年; 1604年)の著者ピエール・シャロンが、その代表格であると考えられる。

したがって、以上の歴史的事象を学術的背景とする本研究では、この《キリスト教的ストア主義》の具体像を能うかがり精緻に描出すべく、この新思潮を代表するリプシウス、デュ・ヴェール、そしてシャロンの三名は、《人間学》という主題に関する限りで、古代ストア主義のなかでもとりわけセネカのいかなる言説を受容し、それをキリスト教的な観点からどのように修正し、そしてその後の近世(フランス語圏)哲学の展開に特徴的な人間学の新体系構築のためにどのように活用したのか、という問いを解明することの必要性が自覚された。そのことは、下記する研究史を念頭においた場合、いっそう言えることである。

近世における古代ストア主義復興に関する研究は、L. Zanta のパリ大学提出博士論文 *La Renaissance du stoïcisme au XVI^{ème} siècle* (1914年)によって鑿開され、Ch. Ch. Julien-Eymard d'Angers の *Recherches sur le stoïcisme aux XVI^{ème} et XVII^{ème} siècles* (1979年)によって整地された。この研究領域からは、学術論文を脇に置くなら、一方で、D. Carabin の大著 *Les Idées stoïciennes dans la littérature morale des XVI^{ème} et XVII^{ème} siècles* (2004年)のような単著が、他方で、フランス語圏ではP.-F. Moreau 編 *Le Stoïcisme au XVI^{ème} et au XVII^{ème} siècle* (1999年)や英語圏ではJ. Sellars 編 *The Routledge Handbook of the Stoic Tradition* (2016年)のような共著が生まれ、本研究もその動向に位置づけられる。しかし《キリスト教的ストア主義》における人間学的考察に関する総合的な検討は未着手であった。国内では、CiNii 論文データベースによれば、国制史の観点からリプシウスを論じた『新ストア主義の国家哲学』(1985年)の著者・山内進氏、宗教戦争期におけるデュ・ヴェールの官吏としての役割を解明した羽賀賢二氏、邦語で読めるシャロン研究の唯一の著者・葉狩隆夫氏の個別研究のほか、日本哲学会編『哲学』に掲載の論文「セネカと折衷主義——ユストゥス・リプシウスにおける悪と宇宙周期」(2009年)の著者・坂本邦暢氏を除けば、関連研究は皆無であり、さらに科学研究費助成事業データベースで「新ストア」で検索してみると、これをキーワードに含める研究課題は、スピノザ哲学の生成をこの思潮との連関から分析しつつある笠松和也氏を除けばやはり皆無であったため、研究の間隙を埋める必要があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、従来の西洋哲学史研究において十分な関心を集めてきた所謂《12世紀ルネサンス》(とスコラ学の誕生)ならびに《14世紀ルネサンス》とは区別して独自に考察すべき歴史的事象として《16世紀ルネサンス》(と人文主義の誕生)を前景に押し出すことで、近世(英語: early modern)と呼ばれる時代区分に特徴的な哲学的営為の多様な源泉の一つをそのうちに求め、かつ、詳らかにする取り組みの一翼を担うことであった。この場合の「ルネサンス」とは、古代懐疑主義(ピュロン主義とアカデメイア学派)、エピクロス主義、そして本研究が関心を寄せる古代ストア主義の復興であり、それが近世哲学の生成と展開に果たした役割を多角的に解明する研究に本格的に参入することは、この時代に活躍したデカルト、スピノザ、ライプニッツなど大哲学者を論じれば事足りるとする従来の西洋哲学史研究に修正を迫るはずである。

3. 研究の方法

本研究では、《キリスト教的ストア主義》という思潮に共時的(シンクロニック)な観点からの分析と通時的(ディアクロニック)な観点からの分析を施すことを方法とした。

共時的分析として、本研究のメインテーマである人間学を《政治論的人間学》と《道徳論的人間学》に二分したうえで、リプシウス、デュ・ヴェール、シャロンによる上述の一次資料のうちに共通して見出される諸論点をまずは同定し、各人はその個々の論点に関して、とりわけセネカに代表される古代ストア主義のどの言説を受容し、それをキリスト教的な観点からどのように修正(場合によっては棄却)しながら考察しているかを記述することにした。《政治論的人間学》に関しては、仏語の *politique* という語が既成の学問分野としての「政治学」ではなくて、人間の共同体——その典型が政治体(希語: *polis*、羅語: *civitas*、仏語: *cit *)——に関する考察と言説を指示するかぎり、人間はいかなる他者といかなる種類の外的関係をいかなる手段で取り結ぶのかという問い(世界市民論、臣民の規律化、等々)が論じられるのに対して、《道徳論的人間学》では、人間は自己といかなる種類の内在的関係をいかなる手段で取り結ぶのかという問い(アパテイア論、徳論、精神の諸能力の指導、臆見の排除、人生の儻さと死への怖れ、善と悪に関する無関心、等々)が論じられるだろうという見通しを立てた。そのうえで、通時的分析として、人間学を構成する個々の論点について、リプシウス - デュ・ヴェール - シャロンという系譜において何らかの変化が確認できるかを検討することにした。

4. 研究成果

本研究の成果は、大きく分けて以下の3点にまとめられる。

① リプシウスにおける運命論からシャロンにおける意志論へ

《キリスト教的ストア主義》の生成と展開を追跡するうえで筆頭に挙げられる問題は、「摂理(*providentia*)」と「運命(*fatum*)」の関係であることが判明した。

リプシウスは『精神の不屈について』(本研究課題の一貫として、第一部の日本語訳を作成し、現在、発表に向けて推敲中)のなかで、おそらくエピクロスの箴言集『主要教説』の冒頭を凝縮させた「テトラパルマコス(*τετραφάρμακος*)」を念頭に置きつつ、「公の不幸」について以下の四点を説く。すなわち、①それは神によって与えられ、あちこちへと送られる、②それは必然的であり、しかも運命的である、③それは有用である、④それはさほどひどくもなければ特に今日的なわけでもない。ストア哲学とキリスト教の融合という観点からすると、最も問題になるのは第二の論点である。リプシウスは必然ということ、潮の干満や気候の変動といった自然現象が周期的にあるいは突発的に移り行くさまを、つまり、人事を含めた万事は例外なく変転することを考えている。しかし、キリスト教からすれば、この世の事象を神が案配する仕方について、必然を云々することは厳密には人間にはできないはずである。実際、リプシウスは、神が創造者であることを指摘するが、神についてはそれ以上のことを論じない。人間は、神の存在を前提として、その作用だけを確認するしかない。それでは、「摂理」とは何か。それは、「神のうちに」あって「すべてのものを注視し、知り、統べる力(*vis*)にして力能(*potestas*)」とされる。さらに、この「力」は「普遍的で、分たれず、凝縮しており(*universa, indivisa, stipata*)、[.....]一体化している(*uniter juncta*)」。そのうえで、人間は摂理のなかに神意を探り、それを包括的に理解することは不可能である。

それでは、いかにすれば人は「公の不幸」を前にして「不屈」になれるのか。リプシウスがとった解決法は、「摂理」と「運命」を原理的に区別することである。リプシウスは、「摂理」の「派生的」「個別的」形態、「摂理」が「展開されたもの」、それを「運命」、つまり「摂理に発して、可変的な事物に内在する、それ自体は不変な決定(*decretum*)」にして「各事物の秩序、場所、および時間を、しっかりと(*firmiter*)決定するもの」と捉える。「運命」という概念は、古代ストア派における重要学説の構成要素の一つをなし、摂理と(ほぼ)同義とされた。リプシウスは、この見解を「道理」や「真理」に近いものとして一定の評価を下す。実際、セネカはセレーヌスに宛てた『魂の平静について』において、良き魂の状態(*εὐθυμία*)を「平静(*tranquilitas*)」と呼び、そのうえで、この境地に到達するための実践的方策として、「生はことごとく隷属」で

あり、災難は必然であるがゆえに、「運命」を受け入れ、慣れることを説いた。しかしリプシウスは、このような絶対的運命観を否定する。つまり彼にとって「運命」は、「摂理」そのものではなく、「摂理による永遠の決定」なのである。そして、それに対して精神は「不屈」という力を発揮できるとする。換言するなら、「運命」が事物・事象の領域に割り当てられることによって、「運命」を補助するかたちで人間の「意志」と「行為」がそれに関与する余地が確保されることになる。リプシウスが、「神は運命の襲撃 (impetus) によってすべての人間的な事象を動かすが、それ独自の力もしくは運動を排除しない」と断言する所以である。「運命」の作用する領域では、人間の自律的活動が認められるのだ。

《キリスト教的ストア主義》の枠組みにおいて人間の自律的活動の可能性を取り出す試みは、シャロン『知恵について』のうちに引き継がれることも判明した。とりわけ、「真の知恵とは、理性の命に従う、意志のまっすぐで堅固な態勢である」とするシャロンの思想のうちに、各人に本来的に帰属するものとして古代ストア派において重要な意味を与えられた「意志」との近似性を分析した。ただし、シャロンにおける意志論は、16世紀半ば以降、カルヴィニズムから出て個人主義・神秘主義に傾倒するオランダのキリスト教思想家（「教会なきキリスト者」）がおもに奉じた「精神において人は一切を判断し、誰からも判断されない」（パウロのコリント信者への手紙）という文言に集約される人間観に定位するため、《キリスト教的ストア主義》の典型例をなすものであることが理解された。

② リプシウスにおける情念論からデュ・ヴェールにおける情念論へ

リプシウスは『精神の不屈について』において、「人間の生活を全般にわたって妨げ悩ます」主要な情念として「熱望 (cupidas)」「喜び (gaudium)」「恐れ (metus)」「悲嘆 (dolor)」を挙げつつ、「不幸」に対して持たれる後二者のうち、「悲嘆」の対処に多くの紙幅（第1巻第9章～第2巻末尾）を割いている。このテクニカルな事実は、キケロの『トゥスクルム荘対談集』第4巻が報告する古代ストア派の情念論と対照させると興味深い。

キケロによれば、「情動に四つの種類があり、不屈には三つの種類がある。なぜなら、不屈には苦悩に対置すべきものがないから (Sic quattuor perturbationes sunt tres constantiae quoniam aegritudini nulla constantia opponitur)。「不屈」がいわゆる良き感情 (εὐπάθεια) に相当するものと捉えられていることが注目に値する。そしてそれは、もちろん情念 (πάθος) ではない。実際、キケロによれば、古代ストア派が列挙する四つの主要な情念のうち「苦悩 (aegritudo)」を除く三つには、以下の良き感情が対応する。すなわち、「喜び (χαρά; gaudium)」が、「欲望 (libido)」には「望み (βούλησις; voluntas)」が、「恐れ (metus)」には「用心深さ (εὐλάβεια; cautio)」が対応する。

ところで、古代ストア派は、悪と思いなされる対象、つまり臆見の水準にある悪が現前している場合に生ずる苦悩という情念——リプシウスの用語では「悲嘆」——について、それを良き感情として魂の機能のうちに見出すことに困難を感じていた。その一方で、苦悩に対応する合理的等価物は、のちにキリスト教思想において「慰め」として主題的に論究されることになったと考えられる。ところがリプシウスその人は、苦悩=悲嘆について多くの紙幅を割いて論ずるも、そしてボエティウスの『哲学の慰め (De consolatione philosophiae)』第4巻と第5巻を参照しつつも、「策励 (alloguim)」や「慰藉 (solatium)」について十分な概念的な分析も問題論的考察も行っていない。

ストア派の情念論に、「慰め」という優れてキリスト教的な概念を接続するためには、デュ・ヴェールの出現を待たねばならない。彼は、リプシウスの『精神の不屈について』を読み込んで、自身の不屈論を展開した一方で、政治に携わる実際活動の人として、「不屈」をキリスト教的な「慰め (consolation)」の方に傾け直し（『社会の災禍に際しての精神の不屈と慰めについて』第3巻）、実践道徳的なトーンをリプシウスよりも強めたと考えられる。この点にこそ《キリスト教的ストア主義》の一つの思想的頂点が見出される。

そのデュ・ヴェールについては、『ストア派の道徳哲学』の日本語初訳の作成、ならびに内容の分析も行なった。全訳は推敲中であり、いずれ発表予定である。内容については、以下のことを明らかにした。彼は、エピクテトス『提要』をフランス語に訳しつつ、これは「美しいが不十分な作りの部品から成る」と述べているように、連続的なプランが欠如していると考えた。これを補うべく、『提要』から30以上の断片を集めて、それを新しい順番に並べ替えつつも（したがって、いわゆる「寄せ集め」「継ぎはぎ」と呼ばれる文学ジャンルに属す）、その思想をキリスト教に引き寄せて展開した限りで自身にオリジナルな、しかも当該主題に関する最初の本格的なフランス語による書物として『ストア派の道徳哲学』を執筆した。内容は以下の通りである。第一部では、ストア派の基本教義（最高善、徳、幸福、思慮、まっすぐな意志、情念）の紹介がなされる。第二部では、同意の統御について、エピクテトスに依拠した説明がなされる。第三部では、欲求の統御に関する考察、ならびに諸情念の一覧表が提示される。第四部では、「適切なこと」（キケロに依拠しつつ、キリスト教化された理解）の一覧表、集団の尊重、行為と会話における節度、不屈、思慮、希望、忍耐という徳について説明される。最終部では、ストア派的かつキリスト教的な霊的訓練が「良心の吟味」として提唱されると同時に、私たちの力だけでは不十分な浄化という企図を完成させ、かつ、これを永続的なものにする「神への祈り」が掲げられる。論考の全体は、基本教義の反復の印象が強いが、これは読者を説得するためと考えられる。《キリスト教的ストア主義》の具体像の解明のために、第四部と最終部の分析に多くの時間を割いた。

③ 《キリスト教的ストア主義》の多様な展開

リプシウス - デュ・ヴェール - シャロンという思想史的系譜の延長に、17世紀初頭から中葉までの《新ストア主義》の展開を遠望した場合、それは《キリスト教的ストア主義》に対する多種多様な陣営からの応答の軌跡として理解しうるのではないか、という仮説を立てることができた。図式的には、差し当たり宗教的と形容しうる文脈における古代ストア主義受容として、①キリスト教化するストア主義的言説（「柔和の聖人」サルを指導者に仰ぐカミュなど）、②ストア主義化するキリスト教的言説（ビネやコサンなどのイエズス会士）、③トリエント公会議での決定事項をうけたストア主義批判を展開するキリスト教的人文主義（オラトリオ会士スノーやイエズス会士ガラスなど）、それとは別に④生成の途上にある反ストア主義（アルノーやパスカルなどのジャンセニスト）、さらに、やはり差し当たり、しかし非宗教的と形容しうる文脈における受容として、⑤デカルト的人文主義、⑥自由思想家たちの諸言説、そして⑦文学的ストア主義（悲劇作家コルネイユなど）、以上である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 津崎良典	4. 巻 52巻1号
2. 論文標題 真理とは何か? : 神による永遠真理の自由な創造に関するデカルトの理説をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 203-212
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshinori Tsuzaki	4. 巻 48
2. 論文標題 Taiken, keiken et exercice selon Arimasa Mori, lecteur de Descartes	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Philosophy	6. 最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 津崎良典
2. 発表標題 近世ヨーロッパにおける恒心論の生成と展開：リブシウスの思想を中心に
3. 学会等名 京都ヘーゲル讀書會2023年夏期研究例会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 津崎良典ほか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 323
3. 書名 『幸福をめぐる哲学者たちの大冒険!』	

1. 著者名 津崎良典ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 692
3. 書名 『啓蒙思想の百科事典』	

1. 著者名 ドゥニ・カンブシュネル、津崎良典	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 320
3. 書名 『デカルトはそんなこと言ってない』	

1. 著者名 津崎良典ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青簡舎	5. 総ページ数 434
3. 書名 『身と心の位相』	

1. 著者名 津崎良典	4. 発行年 2020年
2. 出版社 扶桑社	5. 総ページ数 274
3. 書名 『デカルト 魂の訓練：感情が鎮まる最善の方法』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	パリ第一大学			